

仏像起源説再考

——オリッサ出土の磨崖仏からの試論——

DASH Shobha Rani

インド東部・オリッサ州のジャージュプル (Jajpur) 地区のダルマシャーラー (Dharmashala) 地域において (図1参照), 近年およそ10年の間に Kayama, Vajragiri, Panturi, Radhanagar, Tarapur, Neulpur, Deuli, Kankia, Kantigadia, Bandreswara など仏教に関するいくつかの重要な遺跡の発掘が行われた。それらの中で, 「ラングリ発掘」といわれる, ラングリ山 (Langudi Hill) の仏教遺跡の発掘が大変興味深い。本論においては, この仏教遺跡を紹介し, 2007年8月及び2009年2月に私自身の行った調査結果を報告する。その上で, これらの仏教遺跡に対する研究によってインド仏教史に関してどのような新たな知見がもたらされるのか, その可能性についても述べたいと思う⁽¹⁾。

1996年から2003年にかけてラングリ山において, 仏教遺跡の大規模な発掘がオリッサ州考古学局 (State Archaeology Department of Orissa) 及びオリッサ州海洋学・東南アジア研究所 (Orissa Institute of Maritime and South East Asian Studies) の共同作業として行なわれた。

ラングリ山 (lat. 20°.12' N, long. 86°.43' E)⁽²⁾ は州都ブバネシュワルから約85km離れた Jajpur 地区の Dharmashala 地域の近くを流れる Kelua 川の右岸に位置する。文献や発掘された碑文などから, ラングリ山の遺跡は, 玄奘が訪問した古代インドの有名な仏教学院である Puṣpagiri Mahāvihāra (補澁波祇藍僧伽藍) の遺跡であることが判明している。玄奘によると当時オリッサに100余りの僧院があり, 1万人を越す大乘仏教の僧侶たちがいた⁽³⁾。

この場所から初めてアショーカ王の石像が発掘され, インド東部においては最初の, インド亜大陸においても数少ない特殊な形状の巨大仏塔が発掘された。



図1 オリッサ州の全体図および
Jajpur 地区の位置

そして、浅い浮彫の仏塔や、一連の仏像及び僧院の個室の跡などが発見されている。その他いくつかの碑文も発見されて、解読がなされた。その結果、この仏教遺跡がアショーカ王と関連を持つ場所であることが明らかになった。以下に、この遺跡の出土品から、興味深いものをいくつか簡単に紹介する。

アショーカ王によって造られた仏塔

地下1フィートからアショーカ王によって作られたと考えられる巨大な仏塔が出土している(図2(a)・(b)参照)。土台は四角形で上部はドーム状になっている。仏塔のサイズは南北75×東西60×高さ9フィートである。直径は60フィートであり、中から発掘された陶器や碑文などにより紀元前3世紀のものと考えられている。仏塔の台座は紅土(laterite)の壁に囲まれていて、中心部は高くなっており焼き煉瓦でカバーされている。いくつかのサイズの焼き煉瓦が使用されている。最もサイズの大きいものは15×11×3インチである。通常は、仏塔の四方に階段があるが、この仏塔には南側のみ階段の跡が残されている。階段はもともと8本の支柱(stambha)と貫石(sūci)のあったことが残された穴からわかる。仏塔全体が欄楯(vedikā)に囲まれていたことが26本の発掘さ

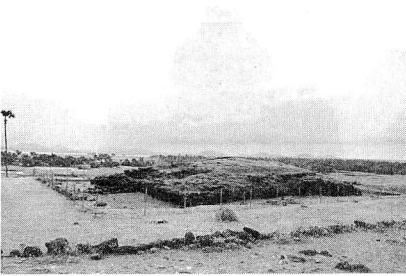


図 2(a) アショーカ王によって作られた
煉瓦作りの巨大な仏塔全体図

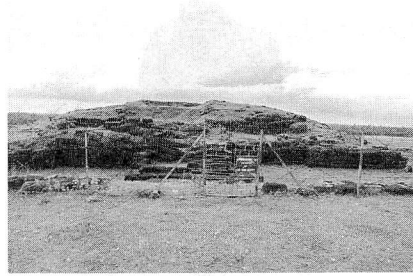


図 2(b) 同仏塔の入口

れた支柱から想像される。この中で、2本のみが蓮華の円形浮き彫りで飾られていて、残りの24本には彫刻が何も施されていない。紅土 (laterite) の4本の柱は4隅にあった。東南方以外の3本は発掘の時に発見された。支柱と貫石の彫刻が何も施されていない部分はアショーカ王の時代のものであり、彫刻が施されている部分はシュンガ王朝⁽⁵⁾のものであると考えられている⁽⁶⁾。

このような仏塔がインド東部で発掘されたのは初めてで、インド亜大陸全体においても非常に少ない。なお、スリランカのアヌラダープラおよびインドネシアのボロブドゥルに同じような形の仏塔が存在するが、それら南アジアや東南アジアに存在する仏塔がオリッサの仏塔建築の影響を受けたものであることがラングリ山⁽⁷⁾発掘から明らかになっている。

この仏塔からテラコッタの仏像、仏足跡、鹿、傘蓋 (chatra / chatrāvalī) などが発見されている。そして、テラコッタの耳飾り、腕輪、ビーズなども発掘された。それに基づいて発掘担当の考古学者 Pradhan 博士は、ラングリ山の仏塔が尼僧たちと関係を持つものであるとする見解を述べている⁽⁸⁾。現在のところ尼僧と限定することはできないが、少なくとも何らかの形で女性がこの場所と関わりを持っていたに違いないであろう。

砂岩 (sandstone) で作られた二つ異なるサイズの傘蓋の断片も発掘されている。これらは恐らくアショーカ王の時代に仏塔の最上にある平頭 (harmika) と言われる四角い基部の上に飾られていたものと思われる。



図3 出土した説法印を結ぶ仏像



図4 出土した定印を結ぶ仏像

モーリヤ王朝の陶器 (Mauryan pottery) として有名である Northern Black Polishedware (NBP の略名でよく知られている) の二つの陶器の破片が仏塔の中から見つかった。一つは銀の光沢のある黒色のものであり、もう一つは金色の陶器 (golden glazed northern black polished ware) である。このような陶器がアショカ王の時代に広く使われていたことはよく知られている。

仏塔の中から二つ仏塔の形をした石が発見されている。この石には非常に珍しい結跏趺坐の仏像が彫られている。一つは説法印 (*jñāna-vyākṣāna-mudrā*) を結び (図3参照)、もう一つは定印 (*dhyāna-mudrā / samādhi-mudrā*) を結んでいる (図4参照)。Pradhan 博士はこのような形の仏像は初期仏教から大乘仏教への過渡期のものであるとの解釈を示している。

仏塔の近くから石碑が発掘されている。コルカタ大学の元教授である有名な碑文学者であり歴史学者である B. N. Mukherjee 教授は、それを「*āmi [upāsa] ka asokasa samchiamānā agra 'eka thūphe . . .*」〈Skt. *āmiṇaḥ upāsakasya aśokasya saṃchitamānānām agre 'ekasmin stūpe . . .*〉と解説し、その意味を「宗教を切望する在家信者アショカの蓄積された高さの際立った仏塔に……」と解釈している。彼は、古文書学の視点からこの碑文が1世紀

の終わりごろまたは2世紀のものであると判断する⁽⁹⁾。

さらに、玄奘の記録によれば、アショーカ王は仏陀が説法した場所の10箇所に10の仏塔を建立したという⁽¹⁰⁾。もし、当仏塔がその中の一つであれば、仏陀がオリッサまで遊行したということになるであろう。

アショーカ王の石像

この仏塔の周辺からアショーカ王の二つの石像が発掘されている。現在それはオリッサ州立博物館に保管されている。この二つの像の裏側に初期ブラーフミー文字 (Brāhmī) を使用しプラークリット語 (Prākṛta) で書かれた碑文が残されている。

2000～2001年の発掘の時に裏に碑文の入ったアショーカ王の上半身の石像 (34×20×14cm) と右足が発見された (図5参照)。これは仏塔の入り口の階段の右側に下向きで落ちていた。右足の形から、これは坐像であったと推測される。Mukherjee 教授は石像の碑文を「cchikarena rāñña asokhena」(アショーカ王の御手によって) と解釈し、碑文学の立場から紀元前2世紀のものと判定した⁽¹¹⁾。この像には、アショーカ王は冠またはターバンを着けない姿で描かれているが、耳飾りや首飾り、額にある文様および碑文から、これはアショーカ王の石像であることが判明している。それは、冠を着けずに仏塔に向かって座っているポーズから、恐らく王が仏を礼拝する像ではないかと考えられている。

次に発見されたアショーカ王のもう一つの石像 (52×50×12cm) は王座 (rājātilāsana) に座ったポーズをとっている (図6参照)。右側に妃または女性使用人が描かれている。恐らく左側にももう一つの女性像があったであろうことが破壊された部分から推測できる。インド考古学局 Mysore 支部の碑文学者 N. N. Swamy 教授, Chennai 支部の S. N. Rajavelu 博士, そしてオリッサの碑文学者 S. N. Agrawala 氏は裏の碑文を「rāñña asoka」(アショーカ王) と解釈し、紀元前2～3世紀のものとする見解を述べている⁽¹²⁾。なお、2002年に Mukherjee 教授は「śāka [sa] raño atāka [sa]」<Skt. Śrāvakasya rājñah atākasya> (仏弟子であるアターカ王の) と解釈し、紀元前2世紀～紀元後2世紀



図5 アショーカ王の石像および裏の碑文

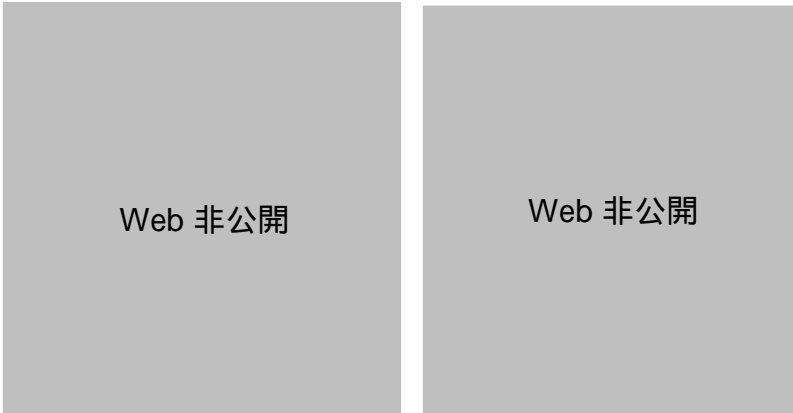


図6 王座に座ったポーズのアショーカ王の石像および裏の碑文

の間に書かれたものとする見解を述べる。ただし、この時代にアターカという王が存在したということは現在のところ知られていないため、恐らくアショーカ王のことであろうと思われている。⁽¹³⁾

両方の石像はコンダライト石 (khondalite 孔茲岩) で創られている。碑文入りのアショーカ王の像が発掘されたのはこれが初めてのようである。今まで発見されているアショーカ王の殆どの碑文には、彼は自分のことを「アショーカ」ではなく「神々の愛する者 devānām piya」と記述していることはよく知られている。しかし、ラーングリ発掘の碑文に「asoka」と彫られていることは、



図7 密教のパネル—1



図8 密教のパネル—2

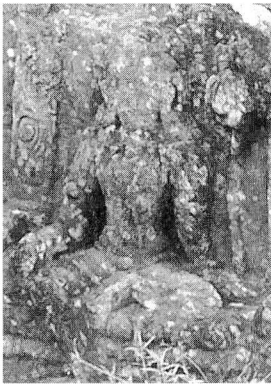


図9 蓮華手菩薩



図10 阿弥陀仏

極めて興味深い。それは恐らく、アショーカ王自身がこの仏塔の建立に関わっていたことを示すのではないかと考えられている。このラングリ山の僧院 Puṣpagiri vihāra の僧侶たちの影響によってアショーカ王は Caṇḍāśoka から Dharmāśoka に変わったのではないかと推測されている。

密教の世界・他

仏塔から少し離れた所に高い浮彫の密教のパネルが見られる（図7・8・9・10参照）。丁寧に彫られ、様々に飾られたこれらの彫刻は技術の高さを示している。密教の五仏である阿閼如来 (Akṣobhya), 大日如来 (Mahāvairocana), 阿弥



図11 浅い浮き彫りのパネル

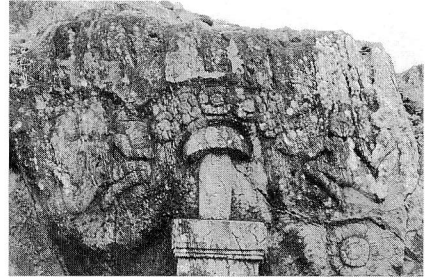


図12 仏塔の両側に蓮華の花輪を捧げる天女たち

陀如来 (Amitābha), 宝生如来 (Ratnasambhava) と不空成就如来 (Amoghasiddhi) および彼らの妃 (脇侍女神) である仏眼仏母 (Locanā), ヴァジュラダートヴィーシュヴァリー (Vajradhātviśvarī), 白衣明妃 (Pāṇḍarā), 我母 (Māmakī), 多羅 (Tārā) の美しい像が見られる。これは8～9世紀のものと判明している¹⁴⁾。

焼き煉瓦で造られたたくさんの個室のある僧院, テラコッタの印章, 岩石の五つの洞窟や細長い奉納塔なども発掘されている。

浅い浮き彫りのパネル

発掘された遺跡の中で, 岩の上に彫られた膨大な浅い浮き彫りの仏塔と仏像のパネルが特に注目される (図11参照)。非常に狭い場所に集中して, 様々な形とサイズ (12cm～160cmまで) の, 合計64の仏塔が彫られている。インド考古学局ブパネシュワル支部のMilan Kumar Chauley氏によれば, これらの仏塔はオリッサで発見された初めてで唯一の浅い浮き彫りの奉納塔である。花輪を持って仏塔を供養している天女 (もしくは魔法使い vidyādhara) たち (図12参照), 仏塔を持ち上げている夜叉 (図13・14参照), 蓮華の花 (図15参照) や花輪で飾られた仏塔 (図16参照), 楽器や舞踊で供養している人々 (図17参照) などが描かれていることは, 後に述べる彫刻の解釈にも関係する注目すべき特徴である。

仏像はすべて壁がん (壁のくぼみ) の中に彫られた坐像仏である。坐像仏の形は触地印か定印かのどちらかである (図18・19参照)。仏像の作りは極めて粗



図13 仏塔を持ち上げる夜叉
(下部)と仏塔を供養す
る天女たち(上部)

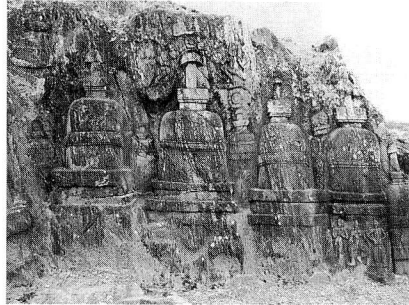


図14 整然と並ぶ仏塔



図15 両脇に蓮華とその蒼
みで飾られた仏塔



図16 蓮華の花輪で飾られた
仏塔

く、技法から見て非常に未熟である。楽器を演奏したり踊っている人たちの耳の形や脚の位置はオリッサの彫刻や芸術には見られないユニークな形をとっている。¹¹⁹



図17 人々の演奏で供養される仏塔



図18 触地印を結ぶ坐像仏



図19 定印を結ぶ坐像仏

仏像彫刻発祥の地としてのラーングリ山

以上のことから、ラーングリ山遺跡は紀元前3世紀から9世紀までの長期間にわたって造り続けられた遺跡であると考えられる。そこで検討したいのは、浅い浮彫パネルの制作年代及びその特徴である。残念なことに人の手に触れら



図20 多数の仏塔と残りのスペースに彫られた仏像



図21 仏塔と仏塔の間に彫られた仏像

れてしまったため、科学的検査によってその正確な制作年代を確定することは困難である。周辺からの出土品に基づき、考古学者たちはこのパネルの製作年代を部派仏教から大乘仏教への転換期のものではないかと推測している。そこで、形状、碑文、周辺の出土品など、現地の考古学者たちが既に検討した資料に基づきつつ、別の観点から、その作制年代や様式について新たな検討を加えて、その上で仏教美術史の再検討の必要性を提起したい。

まず、年代の問題、すなわちそれがいつ造られたかについて考えてみよう。このパネルには仏像と仏塔との両方が描かれているという、他に類を見ない様式が用いられている。それらはその風化の度合いや彫刻の様式から考えて同時代に造られた可能性が高い。しかし、そこには大きな特色がある。それは、仏像が描かれてはいるが、仏塔に重点が置かれていることである。それは以下の3点から明らかである。

1. 仏塔の数(64)に比べ仏像の数(4)が非常に少ない(図20参照)。
2. 全体のレイアウトとして仏像は仏塔の彫られた後に残された空間に彫られている(図20・21参照)。
3. 仏塔が演奏や花輪で供養され、夜叉によって持ち上げられ、天人及び人間の両方に崇拝されているのに対して、仏像の供養されているモチーフは見当たらない。

仏像の出現は通常1～2世紀と考えられている。仏像の出現以前は、仏塔、菩提樹、仏足跡などが仏陀を象徴していた。インド人が仏像を描かなかった理由について様々な説がある。その中でも最も支持を受けているのは、仏陀は絵や像で表わすことができないほど超越的な存在であると考えられていたことをその理由とするものである。アショーカ王の時代においてもそのような考えによって仏像は描かれていなかったとされている。問題の浮き彫りパネルにおいて、仏像ではなく仏塔に重点が置かれていることからすれば、このパネルは人間の姿で仏陀を描くことが一般的には許されていなかった時代のものであったと考えられる。もし、仏陀を人間の姿で描くことが一般的となっていた時代のものであれば、このパネルの所属している Puspagiri 大僧院のような重要な場所では、仏塔ではなく仏像が中心となり、仏像が崇拜されているモチーフが彫られたに違いない。

故に、このパネルの制作年代は、仏像が一般的となる1世紀より前と考えることができる。さらに、碑文を含む周辺からの出土品を考慮に入れば、このパネルの制作年代を紀元前2世紀～1世紀初めに限定することができるであろう。

このパネルに見られる上記の特徴、例えば、仏塔と仏像の混在、前例のない仏像の形や仏像および人間の非常に長い耳、恐らく踊り手である人の同方向に向かって彫られている足の位置、仏塔が無数にあることを示唆するように並ぶ浅い浮き彫りの奉納塔などは、今まで知られているガンダーラ美術やマトゥラー美術に見られない要素をもっている。ゆえに、ガンダーラ様式やマトゥラー様式とは別に、オリッサやその近辺に独自の様式が存在し、彫刻者たちが仏像造りを試みた可能性を否定することはできないことになるであろう。

次に、このパネルの特徴に注目したい。オリッサには古くから石造彫刻に関しては優れた伝統技術がある。州都ブバネシュワルの郊外にある Dhauligiri に見られるオリッサ最古の石造彫刻と言われる、紀元前3世紀の、アショーカ王碑文の近くにある一本の石に刻まれた象の彫刻¹⁶をはじめとして、紀元前2世紀の Khaṇḍagiri や Udayagiri のジャイナ教洞窟や、世界遺産の一つである



図22 演奏で仏塔を供養する人々(拡大図)

スーリヤ寺院のコナーラク (Konark) を含む数々の彫刻がその豊かな伝統を物語っている。以上のような古い彫刻、あるいはその他の数多くの後代の彫刻を見れば、オリッサの職人たちの石造彫刻の技術の優秀さ是一目瞭然である。紀元前2世紀の彫刻に見られる人物がきれいに整った姿で描かれているのに対して、ラーングリ山に見られる仏像は技術的に非常に未熟である。

次に、パネルの中で舞踊や楽器を用いて、仏塔の供養をしている人物の姿について検討しよう。その耳の形が非常に長いことや、踊り手の両足が同じ方向を向いていることなどから、それがオリッサ独自の様式でないことはほぼ間違いない(図22参照)。オリッサだけでなくインド舞踊の様式としても有り得ない形である。現在のところオリッサやインドのほかの地域からも同様の特徴のある彫刻は発見されていない。発掘調査に当たった Pradhan 博士は、その理由を未熟な彫刻者によって造られたからであろうと言うが、モーリヤ王朝の保護の下に造られたと思われる遺跡に、未熟な彫刻者が命じられてパネル制作に当たったとは考えにくい。

また、出土品の中にはブラーフミー文字で「[pu] phagririka-k [a]- nana-haladharakasaprarachavalasa」(ブシュバギリ庭園の農夫であるブラチャヴァアラの…)と刻まれた石も発見されている。碑文の中では、「griri」という単語が使われている。碑文を解読した Mukherjee 教授の指摘に基づけば、これは

「giri」つまり山のことである。「giri」のことを「griri」というように「g」の後に「r」を付け加えて表現するのは北西プラークリットの音韻上一般的なことであり、東[インド]の方言ではないとする意見を述べている。⁽¹⁷⁾ Mukherjee 教授の意見が正しければ、この碑文は、それがオリッサ人によって書かれたということを否定する材料になるであろう。

オリッサのほかの地域の彫刻と比較して稚拙さや様式の違いが見られることからすれば—もちろん現状で入手し得る限りの資料に基づけばとの限定が必要だが—このパネルの制作には、当時の石造彫刻に熟達していたオリッサ人とは異なる人々も関与していた可能性が考えられる。

仏教美術史解明のために

現在、この遺跡の発掘は中止されている。発掘予定の面積は約143エーカー（約57万8721平方メートル）であるが、そのうちのほんのわずかししか発掘がなされていない。既に発掘された遺跡の保存修復作業の終了後に、再び発掘が開始される予定と聞いている。しかし、最後の発掘から6年も経過しているにも拘わらず、いまなお保存修復や追加発掘を行なう様子が見られないのは残念である。発掘されたものも徐々に雨風の被害を受けている。仏教美術の新たな展開に関する上記の仮説を証明するためには、未発掘の遺跡の発掘が必要であると思われる。しかし、仏教史を解明するために重要なこの遺跡の発掘調査には、一つ大きな問題がある。それは、発掘調査に当たっている考古学者たちは仏教に興味がない、或いは、仏教に関する知識が乏しいと思えることである。仏教史解明のために、仏教学や仏教美術を専門とする研究者たちがこの遺跡に関心を持ち、考古学者たちと共に研究に当たることが、インド仏教史にとって新たな展開をもたらすものと考えられる。そして、このような仏教遺跡の発掘が進むことによって、仏像彫刻の発祥を示唆する地が新たに登場し、ガンダーラやマトゥラー起源説に対する再検討の機会が与えられるのではないかとと思われる。

註

- (1) 時代の判別などについては、碑文学者の B. N. Mukherjee 教授および発掘の担当者である Debaraj Pradhan 博士の現在までに公開された論文、そして Pradhan 博士と討論に基づいている。
- (2) Pradhan, D. R., “Aśokan Stupa Discovered at Langudi Hill”, 2000, p. 13.
- (3) 烏荼國。周七千餘里。國大都城周二十餘里。土地膏腴穀稼茂盛。凡諸果實頗大諸國。異草名花難以稱述。氣序溫暑風俗獷烈。人貌魁梧容色黧黝。言辭風調。異中印度。好學不倦多信佛法。伽藍百餘所。僧徒萬餘人。並皆習學大乘法教。天祠五十所。異道雜居。諸窰堵波凡十餘所。並是如來說法之處。無憂王之所建也。國西南境大山中有補澁波祇藍僧伽藍。其石窰堵波極多靈異。或至齋日時燭光明。故諸淨信遠近咸會。持妙花蓋競修供養。承露盤下覆鉢勢上。以花蓋笱置之便住。若磁石之吸針也。此西北山伽藍中有窰堵波。所異同前。此二窰堵波者。神鬼所建靈奇若斯。國東南境臨大海濱有折利坦羅城(唐言發行)。周二十餘里。入海商人遠方旅客。往來中止之路也。其城堅峻多諸奇寶。城外鱗次有五伽藍。臺閣崇高尊像工麗。南去僧伽羅國二萬餘里。靜夜遙望見彼國佛牙窰堵波上寶珠光明。離然如明炬之懸燭也。
(『大唐西域記』卷第十, T51, p. 928b ~ c)
- (4) Pradhan, D. R., op cit, 2000, p. 16.
- (5) Śuṅga Dynasty B.C. 185~73. モーリヤ朝の衰微の後成立した。
- (6) Pradhan, D. R., op cit, 2000, p. 15.
- (7) この見解は Orissa Institute of Maritime and South East Asian Studies の報告書および Pradhan 博士のインタビューに基づく。
- (8) Pradhan, D. R., op cit, 2000, p. 15.
- (9) Mukherjee, 2000, p. 64.
- (10) 脚注(3)を参照。
- (11) Pradhan, D. R., op cit, 2000, p. 16.
- (12) Pradhan, D. R., “Rare Statues of Asoka Discovered”, p. 45.
- (13) Mukherjee, 2002, pp. 13-14.
- (14) Pradhan, D., “Identification of Puspagiri”, 2000, p. 42.
- (15) ibid.
- (16) Hazra, 2007, p. 239.
- (17) Mukherjee, “An Early Inscription from the Langudi Hill Area”, pp. 1-3.

参考文献

1. Beal, Samuel, *Si-yu-ki: Buddhist Records of the Western World*, Vol. II, Kegan Paul, Trench, Trubner & Co. Ltd. London, 1906.
2. Chauley, Milan Kumar, “A Comparative Study of the Votive Stupas at Langudi, Lalitgiri, Udaygiri and Ratnagiri”, in *Mahasenasiri—Riches of Indian Archaeological and Cultural Studies* (a felicitation volume in honour of Dr. I. K. Sharma), Vol. I, P. Chenna Reddy (ed.), Sharada Publishing House, New Delhi, 2006.

3. Coomaraswamy, A. K., *the Origin of the Buddha Image*, Munshiram Manoharlal Publications Pvt. Ltd., New Delhi, 2001.
4. Geiger, Wilhelm (ed.), *the Mahāvamsa*, the Pali Text Society, London, 1958.
5. Hazra, K. L., *Aśoka as Depicted in His Edicts*, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd., New Delhi, 2007.
6. Krishan, Y., *the Buddha Image : Its Origin and Development*, Munshiram Manoharlal, New Delhi, 1996.
7. Mohanty, Gopinath (et al), "Tapassu and Bhallika of Orissa, Their Historicity and Nativity", in *Orissa Review*, Department of Informations and Public Relations, Govt. of Orissa, Bhubaneswar, Vol. LXIV, No. 4, November, 2007, pp. 1-11.
8. Mukherjee, B. N., "A Langudi Hill Inscription Referring to Asoka", in *Studies in Indian Epigraphy : Journal of the Epigraphical Society of India*, Vol. XXVI, S. Subramonia Iyer (ed.), Caxton Publication, Delhi, 2000, pp. 63-66.
9. Mukherjee, B. N., "Two Early Brahmi Inscription from the Langudi Hill Area (Orissa)", in the *Utkala Pradīpa*, Vol. I, No. 1, pp.15-16, 1997.
10. Mukherjee, B. N., "An Early Inscription from the Langudi Hill Area", in the *Utkala Pradīpa*, Vol. II, pp. 1-4.
11. Mukherjee, B. N., "The Langudi Hill Inscription of King Atāka", in *Studies in Indian Epigraphy : Journal of the Epigraphical Society of India*, Vol. XXVIII, S. Subramonia Iyer (ed.), Mysore, 2002.
12. Narain, A. K. (ed.), *Studies in Buddhist Art of South Asia*, Kanak Publications, New Delhi, 1985.
13. Oldenberg, H. (ed. & tr.), *the Dipavamsa*, Williams and Norgate, London, 1879.
14. Pradhan, D. R., "Aśokan Stupa Discovered at Langudi Hill", in *Circle of Inner Asian Art* (CIAA: SOAS Newsletter), Issue#12, December 2000, pp. 13-17.
15. Pradhan, D. R., "Rare Statues of Asoka Discovered", in *Reference Orissa*, Millenium Edition, A. N. Tiwari (ed.), Enterprising Publishers, Bhubaneswar, 2000, pp. 43-45.
16. Pradhan, Devraj, "Identification of Pushpagiri", in *Reference Orissa*, Millenium Edition, A. N. Tiwari (ed.), Enterprising Publishers, Bhubaneswar, 2000, pp. 37-43.
17. Pradhan, D. R., "Two Rare Statues of Aśoka Discovered at Langudi Hill, Orissa, India", in *Circle of Inner Asian Art* (CIAA: SOAS Newsletter), Issue#13, 2001, pp. 14-16.
18. Pradhan, D. R., "Newly Discovered Buddhist Rock-cut Caves at Langudi and Six Adjacent Hills in Orissa, India", in *Circle of Inner Asian Art* (SOAS Newsletter), Issue 18, December 2003, pp. 26-30.
19. Pradhan, Gopal Charan, "Some Inscribed Images Referring to Asoka", in *Studies*

- in Indian Epigraphy : Journal of the Epigraphical Society of India*, Vol. XXVIII, S. Subramonia Iyer (ed.), Caxton Publication, Delhi, 2008.
20. Prusty, Harish (et al), “Langudi : An Early Historical Buddhist Site in Coastal Orissa”, in *Puratattva : Bulletin of the Indian Archaeological Society*, Vol. 27, K. N. Dikshit and K. S. Ramachandran (ed.), D. K. Printworld, New Delhi, 1996-97 (reprint).
 21. Takakusu, J. & M. Nagai (ed.), the *Samantapāsādikā*, Vol. 1, the Pali Text Society, London, 1975.
 22. “Ashokan stupa discovered in Orissa, India”, in *Circle of Inner Asian Art* (CIAA: SOAS Newsletter), Issue#11, June 2000, pp. 11-12.
 23. 定方晟「オリッサ州の仏教遺跡」『東海大学紀要文学部』第67輯，1997年，1～32頁。
 24. 杉本卓洲『インド仏塔の研究』平楽寺書店，京都，1993年。
 25. 高田修『仏像の起源』岩波書店，東京，1983年。
 26. 高田修『仏像の誕生』岩波新書・388，東京，1987年。
 27. 立川武蔵『曼荼羅の神々—仏教のイコロジー—』ありな書房，東京，1987年。
 28. 平川彰『インド仏教史』上巻，春愁社，東京，1981年。
 29. 宮治昭『仏像学入門』春秋社，東京，2004年。